地 域 経 済 ウォッチング

いわき民報 2012 年 7 月 12 日（木曜日）

21世紀の森の夜空を彩った感動的な花火

―自己満足のためのボランティアにはしない―

遠く関西から届けられた思いと行動に感謝

東日本国際大学経済情報学部長

地域経済・福祉研究所長

福迫　昌之

21 世紀の森の夜空を彩った感動的な花火を見上げながら、漆黒のスクリーンに羽ばたく無数の蝶を想起していた。それは、フェスティバルのアンバサダーとして登場したプリンセス天功の姿と、以前流行った「バタフライ効果」、すなわち「ブラジルでの蝶の羽ばたきはテキサスでトルネードを引き起こすか？」というフレーズで知られるカオス理論のイメージがオーバーラップしたのかもしれない。

去る 5 月 27 日、「21 世紀の森公園復興フェスティバル」が開催された。朝 10 時から夜 8 時までの長丁場のイベントで、午後の「イースタンリーグ巨人対楽天戦」を挟み特設ステージで多彩なショーが繰り広げられた。

ところで、震災以降いわき市には全国から様々な支援の手が差し伸べられ、「慰問慣れ」している面も否めないが、今回何故プリンセス天功がいわきに来たのか（幾ら掛かったのか）？何故兵庫県からよさこい団体など数多くの市民が来たのか？　など疑問を持った人もいたかもしれない。

ことの発端は 2 月、本学理事長の親族の紹介で「山梨県の花火師が復興支援の花火をいわき市で打ち上げたいらしい。相談に乗ってやってほしい」という依頼だった。私自身、震災以来かなり無理を重ねてきたが、さすがに花火の打ち上げまでは・・・と思っていたところ、後日花火師から連絡が入り、近々いわきに来ると言う。半信半疑だったが、3 月 10 日に気仙沼で震災一周年追悼の花火を打ち上げる途中でいわきに立ち寄った彼は、自身のボランティア経験も交えて、縁があったいわき市で花火を無償で打ち上げたい、また彼のビジネスパートナーである兵庫県の医療法人グループの企画会社が復興支援としてイベント全般を仕切る、そして花火の最盛期である夏季前の 6 月頃に実施したい、と熱く語った。

彼の熱意に心打たれたものの、花火を打ち上げるには様々な制約条件があることは素人でもわかる。ヒントになったのは、彼の話だった。彼はプリンセス天功のショーやプロ野球、J リーグの花火も手掛けているという。そのとき、以前 21 世紀の森で花火が打ちあがったような記憶と、5 月末のプロ野球試合開催という情報がリンクした。

早速、私が硬式野球部長を務めている関係などで既知のいわき市公園緑地観光公社職員に相談をした。実際こうした不確実で「余計な仕事」を受けてくれる市職員を、私は彼以外知らなかった。案の定彼はこの申し出に感謝し、前向きに取り組むことを約束してくれた。

市側の前向きな姿勢を受けて、今度は花火師と企画会社の一行がいわきを訪れた。一行のリーダーである企画責任者は、震災を経験した兵庫県人として何かしたい、必要なステージ機材などすべて無償で提供する、近隣の社高校をはじめ兵庫県加東市から大勢のボランティアが訪れたいと申し出ている、そして、自分たちが宿泊することで少しは経済的に貢献できるのではないか、とまで言ってくれた。

私は彼らを市側に紹介し、その後は下駄を預けてしまったが、フェスティバル当日、感謝

の意を伝えようとした私は、リーダーに「こんなに人が集まってくれて有り難い。感動的なフィナーレを用意しています」と逆に感謝されてしまった。その言葉に違わぬ、それ以上に感動的な一大花火ショーの直後、花火師は私に「ホッとしました」と笑顔で話してくれた。その一言に、そしてイベントを支えた多くのスタッフの姿に、人を喜ばせることを生業とする人たちの「決して自己満足のためのボランティアにはしない」という、プロフェッショナル魂を感じずにはいられなかった。

いわき市民の一人として、私は彼らにどのように感謝すればよいか、その術を知らない。彼らはそんなことを望んでいないのかもしれない。ただ、あの花火を見た人たちには知ってほしいし、子供が一緒だったなら伝えてほしい。復興応援のために、あたかも当然のことのように「自分のできること、すべきことをする」人たちがいたこと、遠く関西から一昼夜バスに揺られて来て、帰って行ったことを。

あの夜の花火が、今後どこでどんな渦を生み出すかはわからない。ただ様々な偶然が結実した裏には、見も知らぬ人たちの思いと行動があり、それを真摯に受け止めれば我々のできること、すべきことも見えてくるはずである。

あの日ステージを歌とダンスで盛り上げた兵庫のアカペラグループ「UNITE」のブログに、いわき市での経験が感謝の言葉とともに綴ってある。そこに小さな渦はすでに広がっている。